

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりでみる日本の近代化—(4)

— 世界史的視点から —

松原正道^{*}

序

前項では、山口を本拠とする西国の雄大内家を頼り、ここを布教の地としたザビエルとそれを庇護した大内家の当主義隆（永正4〈1507〉-天文20〈51〉）について考察した。

対外（中国、朝鮮等）貿易の「利」を以て朝廷、幕府（足利）を支援し、時に、将軍に弓を引く事もあった有力大名の大内家。

「応仁・文明の乱」（応仁1〈1467〉-文明9〈77〉）後の荒廃した都を見たザビエルは、ここでの布教を断念し、上京の折に立ち寄った、今日、「西の京（みやこ）」を売りにしている山口を布教の地として、義隆の大内家を頼り、ここで活動を展開するのだった。

こうして始まった布教活動。順調にいきそうに見えたのだが、重臣陶晴賢（隆房）の謀反による義隆の死により、それは敢え無く潰えてしまうのである。

尤も、ザビエル自身は、その直前に、豊後（大分）の大名大友義鎮（亨禄3〈1530〉-天正15〈87〉）の招きに応じ九州に渡っていたのである。

本稿では、ザビエルを迎えた豊後（大分）の様子と、日本におけるキリシタンにとって多大な影響を与えた織田信長の台頭について考察を加えたいと考えている。

I

豊後にはザビエルが訪れる以前、何人かのポルトガル人が滞在しており、その中に、『巡廻記』 *Peregrinacao de Fernao Mendes Pinto* (1614) で知られ、「種子島への鉄砲伝来」の際のポルトガル人の一人だと言うピント Pinto (1509頃-83) がおり、著書には、「鉄砲伝来」、ザビエルの豊後到着時の様子等日本滞在中の事が記されているのである。

^{*}淑徳大学名誉教授

ピントが義鎮の父義鑑の在世中に府内を訪れたことがあったのは事実である。

岡田章雄『キリシタン大名』教育社歴史新書 1985 40頁

と言われるが、その著書は、自らが見聞した事、経験した事の他に、伝聞をも緋い交ぜにしており、割引をしなければならないが、それでも貴重な資料だとされているのである。

そのころその領内には中国のジャンク船が来航した。その船にポルトガルの商人が載っていることもあった。義鎮が16歳の時7、8人のポルトガル人が中国のジャンク船に便乗して来たことがある。その中にとりわけ金持で勢力のあったジョルジ・デ・フェリアという商人があったが、

同上書 40頁

と言われるように、ピントの他にも数人のポルトガル人が来航、豊後の中心地府内（府中大分）に滞在しており、中でも、ジョルジ（エ）・フェリア Jorge de Feria（生没年不詳）が「金持ちで勢力があった」と言うのである。これはアンジローの「日本脱出」の時に関わりのあったジョルジュ・デ・フェリアと同一人物と考えられるのである。

そして、

府内にディエゴ・デ・アラガンというポルトガル人が来て5年間も滞在していた。日本語も達者になっていたが、いつも朝と夕にコンタス（数珠）をつまぐって祈りをしていた。

同上書 40頁

と言われるように、府内に5年も滞在し、日本語も達者なディエゴ・アラガン Diego Aragan（生没年不詳）の存在は、豊後におけるキリスト教布教にとって大きな役割を果たしていたと言えるのである。

彼は、朝と夕、コンタス（数珠）を爪繰って祈りを捧げるのを日課としており、この様子を見た日本人がそれを真似し、若い大友義鎮もこれに関心を示したとされるのである。

これは好奇心が強く、新しい物好きと言う特性を持つ日本人を示す典型的な例と言えるのだが、一理あり、これによって大分（府内）にキリスト教が広まっていった事にもなる。

信仰とか信条と言ったものは、それを信じる人間の日常の所作、言動が他の人間に感化を

与える事で広まるものであり、アラガンの日常は周囲の日本人にそれを真似してみたいと感じさせるものがあったと言えるだろう。「真似ぶ」から始まる信仰。

その点で、「ザビエルの日本へのキリスト教伝道」とは言うが、アラガンの存在は日本でのキリスト教伝道と言う点でザビエルの先駆者として大きなものがあったと言える。

その他のポルトガル人は如何だっただろう。ピントの記述からそれが窺えなくもない。そして、アラガンの所作を見た義鎮が彼に何をしているのかと尋ねたと言う。

まだ年若かった義鎮が、何を祈っているのか、日本のカミとホトケに祈りをささげているのかとたずねると、そのポルトガル人は笑って、天地と世界をおつくりになった創造主に祈りをささげているのです、と答えたという。これはいずれも義鎮がのちに宣教師に語った想い出話である。

同上書 40～1頁

こうして始まった豊後でのキリスト教であるが、義鎮は、高い文化と科学・技術に強い関心を持ち、交易によってもたらされる文物、就仲、火薬、鉄砲を手に入れたいと言う事から、それを仲介するポルトガル人とその背景にあるキリスト教に理解を示し、それも他の大名を凌ぐものだったと言われるのだが、自らはその後27年間の紆余曲折を経てからの入信となるのである。

だが、入信に際して、

天正6年(1578)ようやく洗礼を受けた時、洗礼名を選ぶようにとフランシスコ・カブラル神父からいわれた時に、自分が最初に出会った神父はサビエルで、デウスのことをはじめ聴いた。サビエルはきわめて徳の高い聖人であると聞いているので、その名にあやかり、フランシスコと言う洗礼名を差づけて欲しいと申し出た。

同上書 42頁

と言われるのである。

しかしながら、その間、僧体となり宗麟と号する事にもなるのである。

父の吉兼が家臣に討たれ21歳の義鎮がそのあとを嗣いで領主となったのは天文19年(1550)のことであったが、それまでの間に義鎮はポ

ルトガル人との接触を通じてその高い文化と科学・技術—とくに火薬、鉄砲、そして外科医療の技術—を知り、またキリストの教えについても漠然とした知識を得ていた。それだけにその遠い異国に対する憧憬は他の戦国大名とは格段の相違があったといえよう。

同上書 41頁

様々な経緯があったとは言え、ザビエルが山口にいる事を知った義鎮は、彼に手紙を送り、ザビエルもこれに応じたと言う事になるのである。

義鎮の招請によってザビエルは、1551年9月5日迄1年余り滞在した山口を後にして、豊後へ向かうのだった。近くの日出でドゥアルテ・ダ・ガマ船長の船(ナウ)に乗り府内(府中)へ赴くのである。

豊後でのザビエルと大友義鎮との邂逅を、ピントは次のように記している。

神父は王の足元に身をかがめようとしたが、王はそうはさせず、むしろ彼を腕の中に抱えて、前に述べたように、子が父に、臣下が主君に対して行う挨拶であるグロメナルを三度、彼に対して行った。それには居合わせた領主たちは誰もみな大変驚き、私達はなお一層驚いた。そして王が神父の手を執ると、そこまで彼を案内して来た弟君はちょっと後に退った。王は台座に坐り、神父を自分と並んで坐らせ、弟君をもう少し後ろに、ポルトガル人を前方の、居並ぶ王国の領主のそばに坐らせた。

メンデス・ピント 岡村多希子訳『東洋遍歴記』3
東洋文庫 1980 177頁

と。これに先立って、

私達が王宮の最初の庭に到着すると、そこには近衛隊長のフィンジェインドノと、弓、槍、立派に飾られた幅広短剣を帯びた六百人の家来がいた。それは、如何にも有力な王らしい権勢を思わせた。

同上書 174頁

と言う形で迎えられたのである。

一方、日出でザビエルを迎えたポルトガル人の側ではガマ船長によって、

船が停泊している日出川に着くと、示し得る限りにあらゆる喜びに
しるしをもって彼は船にむかえられた。全ての大砲が四度、彼のため
に発射され、揺籃砲、鷹砲、駱駝砲から六十三発が放たれた。

同上書 169～70頁

と言った歓迎をするのだった。



ザビエル浜出の地 大分県 日出町

だが、これは府中の人々を驚かせ、義鎮は、一行が海賊とでも戦っているのではないかと
家臣を遣わす程のものだったと言う。しかし、それは、

ドゥテルテ・デ・ガマはかなり老練で経験豊かな船長である。サビ
エルとはかねて親しく、また熱烈な信者だったので、ポルトガル人が
サビエルをどんなに尊敬しているかを示すために最高の敬意を表した
のである。

岡田 前掲書 41～42頁

とあるように、ポルトガル人の側もザビエルを義鎮を始めとする豊後の人々に偉大な人物で
ある事を強調したのであって、上京の折のみすばらしい姿が、布教の道を開かせなかった一
面でもあったと言う前例を考えての事だったとも言えるのである。

ピントもこの時ガマの船に乗り込んでいた一人で、随行の行列にも
加わっていたらしく、その模様を詳しく記している。黒い法衣の上
に、美しい刺繍で飾った真っ白な司祭服をつけたサビエルが座に着く

時、随従のポルトガル人は色鮮やかな豪華なカパ（合羽）をその足元にさっとひろげた。

同上書 42頁

45歳のザビエルと21歳の義鎮との対面だった。



大友宗麟（義鎮） 大分県 臼杵市



ザビエル説教図 山口市 龍福寺資料館蔵

そして、こうして、豊後での布教活動が始まったのであるが、その後間もなく、

ザビエルはこの地におよそ2カ月滞在した。山口で叛乱が起こったのはその間のことである。叛臣陶隆房はかねてこの反乱が成功した暁には義鎮の弟の晴英を迎えて大内家を嗣がせようと計画し、ひそかに晴英の同意を得ていた。

同上書 43頁

と言った経緯があったと言われる「山口の乱」が起こったのである。

これに義鎮や晴英（？-弘治3〈1557〉）はどう関わっていたのか、いなかったのか。異説があると言われているが、大友義鎮、晴英兄弟の生母が大内義隆の姉だったとも言われているのである。

もし、「晴英の同意を得ていた」と言う事であれば、大友兄弟は叔父にあたるとも言える義隆の死に大なる関わりがあったと言わざるを得ない。いずれにしても、晴英は大内家の当主となって、大内義長を名乗り、キリスト教の保護に勤め、教会堂「大道寺」を創建。これにより、山口はその後の6年間、布教の中心となるのだった。

だが、毛利氏の台頭で陶隆房（晴賢）が討たれると、晴英も兄義鎮の援助を受けられずに、弘治3年（1557）自刃し、栄華を極めた大内氏は滅亡するのである。

これに伴って、ザビエルの後を継ぎ平戸から来て、山口で布教にあたったトーレスも、フェルナンデス等と共に府内に移るのである。

ザビエルを府内に迎えた義鎮だったが、入信には27年の紆余曲折を経るのである。そこには、教会に激しい憎悪の念を抱く、国東の奈多八幡宮の宮司の娘である正室とその兄であり義鎮の重臣の田原紹忍（親賢）の存在があり、家中を慮っての事だった。

先に見た如く、ザビエルは府内に2カ月滞在した後、天文20（1551）年11月15日にインドへ向けて日本を発つのである。

そのため、この後を受けた日本での布教活動はザビエルと共に来航し、その後継者となったトーレスを中心に展開される事になるのである。府内でのキリスト教伝道については後に「ザビエルを受け継いだ人々」の中で触れたいと考えている。

Ⅱ

平重盛（保延3〈1137〉—治承3〈79〉）の子資盛（保元3〈1158〉—元暦1〈84〉）の遺子が越前国丹生郡織田荘織田神社神官の養子となり、織田氏を称したと言うが、藤原氏あるいは忌部氏の末裔で同社の神官の出身だろうと言われている。応永7（1400）年、斯波義重（建徳2〈1371〉—応永25〈1418〉）が尾張の守護になると、織田常昌（？—永享3〈1431〉）が守護代に登用され一族庶子は尾張に移住し、在地に勢力を伸ばす。

「応仁・文明の乱」（応仁1〈1467〉—文明9〈77〉）の契機となる文正1（66）年、斯波氏が義敏（永享7〈1435〉？—永正5〈1508〉）と義廉（生没年不詳）との両派に分かれて争うと織田氏にも内紛が起こるが、斯波氏の領国尾張は守護代織田氏が実権を握る事になるのだが、天文1（1532）年頃、織田氏は更に分裂するのである。

尾張8郡のうち、上4郡は春日井郡岩倉城に拠った織田伊勢守敏広（生没年不詳）が支配し、下4郡は清洲城主織田大和守敏定（生没年不詳）が領する事になるのだった。

清州織田家には家老に織田因幡守、同藤左衛門、同弾正忠の三奉行があり、その1人、大和守敏定の一族で信長の父の弾正忠信秀（永正5〈1508〉—天文20〈51〉）が織田支流の出身だったにも関わらず、勝幡、那古屋、古渡、末森と城を移し、天文年間（1532—54）、両織田氏を抑えるに至るのである。

その間、享祿2（1529）年に三河松平氏を圧倒したのを手始めに、天文13（44）年には美濃の齊藤氏、駿河の北条氏（天文17〈48〉）、今川氏とも争い戦国大名へと成長するのだった。

天文9（40）年には外宮仮殿造営費を献じた事で、翌年、三河守に任じられ、内裏の築地修理費4千貫を献じる等で以て中央権力にも接近するのである。

天文16（47）年に今川義元が三河侵攻を本格化させた事で以て織田、今川両家の緊張関係が増す事になり、その経緯の中で松平元康（徳川家康 天文11〈1542〉、元和2〈1616〉）が

人質として織田家、今川家と行ったり来たりした後、今川の支配下に入るのである。

信秀と土田(どだ)政久の娘との長男として那古野城で生まれた織田信長(天文3〈1534〉-天正10〈82〉)は、天文15(1546)年、古渡城で元服。父信秀の死去により、18歳で家督を相続(天文20〈51〉年)するが、それを不満とした同母弟の勘十郎信勝と争い、これを暗殺するのだった。その後、弘治1(55)年には清州城に移るのである。



信長時代の清州城跡 清州市



清州城 岐阜県 清州市

足利氏同様、八幡太郎義家(長暦3〈1039〉-嘉祥1〈1106〉)の流れを汲むと言われている今川家は、足利義兼(?-正治1〈1199〉)を始祖とし、義兼の孫吉良長氏(建暦1〈1211〉-正応3〈90〉)の次子国氏(生没年不詳)が三河幡豆郡今川荘を領して今川姓を名乗った事から始まるとされるのである。

その孫で、父基氏(生没年不詳)と母香雲(生没年不詳)との間に生まれた範国(嘉元2〈1304〉-元中1・至徳1〈84〉)は足利尊氏(嘉元3〈1305〉-正平13・延文1〈58〉)に従って戦功があったため、遠江、駿河の守護に補任される。以後、これを世襲して領国化し今川家の基礎を築く事で以て初代とされるのである。

室町幕府の初期は武家の棟梁として主従制的支配権を握った尊氏と、統治権的側面を担った弟の直義(徳治1〈1306〉-正平7・文和〈52〉)との二頭政治体制と言ってよく、鎌倉幕府の踏襲、公家・社寺勢力との妥協等保守色の強い直義(徳治1〈1306〉正平1〈52〉)に対して、執事ではあるが実力者の高師直(?-正平6・観応2〈1351〉)の急進的とも言える意見の対立が見られるのだった。

尊氏が師直を支持したために足利氏兄弟が争う「観応の騒乱」(観応1〈1350〉)が起こり、その結果、直義は尊氏によって毒殺されるのだった。

この時の働きで尊氏側につき感状をもらった今川家の2代目範氏（正和5〈1316〉—貞治4〈1365〉）は、駿河南朝の掃討作戦に功績があったと言う。南朝方の武士佐竹兵庫入道が徳山方面を本拠とする錫氏と合流し、北朝方の範氏に対して最後の抵抗を試みたのに対して、範氏軍は7日間の対陣に末、徳山城攻めに成功するのだった。

だが、戦功のあった範氏が父に先立って50歳で死んだため、跡を父範国が引き継ぎ、やがて、3代泰範（建武1〈1334〉—応永16〈1409〉）が継ぐのである。その際、その器量を見込んで範国は次子貞世を後継にと考えたのだが、貞世は兄範氏の遺児氏家こそ守護になるべきだと固辞し、これが美談として取り上げられているのである。

この貞世は九州探題に任命されるのだが、当時、九州地方は、大友、大内、島津、少弐、菊池氏が互いに拮抗して幕府の支配が及ばないところがあったのだ。ところが、貞世は大宰府に菊池武光（？—文中1・応安5〈1372〉）を破ったのを手始めに有力大名、豪族をその政治力で制圧し、幕府の全国支配に貢献するのだった。

しかしながら、在任25年の応永2（1395）年、謀反の疑いで召還され、遠江、駿河の守護となるのである。

そこには、明の皇帝から「日本国王の称号」を得る等対外貿易に積極的だった義満と朝鮮貿易の主導権を巡っての対立が介在していたのである。大内義弘（正平11・延文1〈1356〉—応永6〈99〉）の讒言があったとも言われるが、大内家も対外貿易には積極的だったのである。

叔父、貞世との因縁のある泰範が3代目として跡を継ぐのだが、そこには兄氏家の早世があったのである。

前項で見た、西国の雄大内家の大内義弘が足利將軍家に弓引いた「応永の乱」（応永6〈1391〉）において、義弘は堺で敗死するが、その嫡子新介を捕らえると言ったように、この「乱」において泰範は足利義満の尖兵として戦功をあげるののである。

そして、永享4（1432）年には鎌倉公方足利氏満（正平14・延文4〈1359〉—応永5〈98〉）の動きを牽制するために將軍義満は駿河まで下り、これを泰範は饗応するのである。応永7（1400）年には駿河、遠江の守護を兼ねており、この地は幕府の対鎌倉と言う事で監視役の立場を占めていたのである。

以後、今川氏は駿河の守護を世襲し、4代範政（正平19・貞治3〈1364〉—永享5〈1433〉）、5代範忠（？—康正1〈1455〉）は「上杉禅秀の乱」（応永23〈16〉）、「永享の乱」（永享11〈1434〉）等幕府と鎌倉府との争いに、常に、幕府側に立って活躍するのだった。

範忠の跡を受けた6代義忠（嘉吉2〈1442〉—文明3〈76〉）は、遠江の守護代に斯波義良（生没年不詳）の家臣甲斐八郎（生没年不詳）が任じられた事から国人の反抗が続く事となったため、これを討つために遠江に出陣し、国人、横地、勝田氏を討つのがあったが、その帰途、流れ矢に当たって落命。

彼の死によって、家督を巡る一族・家臣の争いが起こるのだが、北条早雲（永享4〈1432〉永正16〈1519〉）に頼った氏親（文明2〈1470〉-大永6〈1526〉）が7代目の家督を継ぐ事になるのである。

父の死により、僅か7歳の氏親は母の北川殿に抱かれて伯父北条早雲の元に逃れ、伊豆の足利政知（永享7〈1435〉-延徳3〈91〉）の援助、早雲の斡旋により、内乱を収めて家督を継ぐのである。

永正9（1512）年、遠江国の大河内氏が謀反すると、家臣の朝比奈泰熙（生没年不詳）を派遣してこれを討ち、また、大河内氏と呼応して遠江に侵入した斯波義連（生没年不詳）と戦い、(17)にはこれを尾張に駆逐して領国を固めるのだった。

「土地と農民を直接掌握する」検地の施行、「戦国家法」とも言うべき大永6（26）年の「今川かな（仮名）目録」の制定等、「幕府あつての守護大名と言う事から、幕府とか將軍とかの絆を断ち、自己の領国支配原理がすべてに優先する」戦国大名への道を歩むのである。

氏親は、京都の公家大納言中御門宣胤（嘉吉2〈1442〉-大永5〈1525〉）の娘と結婚。嫡男氏輝（永正10〈1513〉-天文5〈1536〉）を始め、6人の男子がいたと言われているが3男玄広恵探、4男泉奨、5男承芳（義元）を僧籍に入れるのである。その点について、

今川氏はこれまで二度にわたって家督相続をめぐって兄弟間や一族内で争いを生じた苦い経験を有していたことにより、氏親は、自分の死後に再び家督争いが起きないように、家督を相続する嫡男以外の男子は僧籍に入れることを選んだのではないかということである。その際嫡男は病弱であった事を考え、次子の彦五郎だけは俗人のまま置いておいたのであろう。

有光友学『今川義元』吉川弘文館 2008 49頁

と言う経緯があったと言うのである。

氏親の死により、嫡男で、既に、前年、元服していた14歳の氏輝（永正10〈1513〉-天文5〈1536〉）が今川家8代を継ぐのである。だが、未だ14歳と言う事もあり、母である中御門宣胤の娘の寿桂尼（「駿府の尼御台」）が後見人として領国支配に携わるのである。

彼女は、夫の氏親が晩年の10年程、中風を患っていたと言う事で以て、その政治に色々な形で携わっていたとも言われているのである。

氏輝が、若干十四歳で家督を継承した上、病弱で、しばしば統治能力を欠く事態があったのではないかということである。

同上書 34頁

と言った指摘があるが、氏輝は必ずしも病弱だったとは言えないと言う説もある。
だが、

氏輝は偉大な父氏親の呪縛から一步も出られなかったとさえいえる。

同上書 190頁

とも言われるのである。

後見人としての寿桂尼について、

寿桂尼が後見・補佐する事によって少なくとも10年余りの間持ちこたえたということは注目すべきことであろう。

時代がいまだ後のように完全な男系社会になっていず、支配階級においても女性の地位がそれなりに認められていたことの現れと見ることもできる。

同上書 34－5頁

だが、父の呪縛、母の後見の元にあった氏輝ではあったが、やがて、重臣の子を取りたてた馬廻衆の創設、本拠地駿府の外港江尻を流通経済の要とした商業振興策等で独自の領国経営を打ち出してもいるのである。

そして、天文4（1535）年には、北条氏綱（文明18〈1486〉－天文10〈1541〉）と共に武田信虎（名王3〈1494〉－天正2〈1574〉）と戦い甲斐国郡内へ攻め入り、武田の将小山田氏を破るのだった。

また、同年、後奈良天皇（明応5〈1496〉－弘治3〈1557〉 在位1526－）の即位にあたっては、その費用を献上するのである。

しかしながら、翌5年（36）3月、突然氏輝が25歳で死に、時を同じくして2男の彦五郎も没したため、彼らの死については疑問が残されているのである。

彦五郎の死と言う事もあって、家督を巡って、出家していた3男玄広恵探（良真）と善徳寺で修行していた梅岳承芳（義元）との間に争いが生じるのだった。

だが、ここでも「駿府の尼御台」寿桂尼が関わり、彼女の推す承芳が還俗して、名を義元とし天文6（1536）年9代目として家督を継ぎ、従4位治部大補兼駿河守となるのである。そして、領国基盤強化のため東三河、更には西三河・尾張に迄駒を進めて行くのだった。

時恰も、徳川家康（天文11〈1542〉－元和2〈1616〉）の父である松平弘忠（大永6〈1526〉－

天文18 (49) の応援要請により、義元は三河進出の格好の口実を得た事になり、天文15年から可成り大々的な三河攻めを開始し、織田方と戦端を開く事になるのである。

義元による東三河への進出は、天文十二年からと考えられる。(中略)

具体的には天文十五年からかなり大々的な三河攻めを開始している。

小和田哲男『駿河今川氏十代 戦国大名への

発展の軌跡』戎光祥出版 2015 212-3頁

天文11あるいは12 (1542・13) 年には、信長の父織田信秀 (永正5 (1508) - 天文20 (51)) を三河国小豆坂に破るが、本格的な争いは天文15年からとされるのである。

今川勢と織田勢の抗争は、天文十五 (1546) 年以來続いてきた。若き日の義元が、軍師である太原崇孚雪齋とともに戦いを繰り返してきたのは、信長の父親・織田信秀であった。信秀の没後は、家督を継いだ信長との戦いになったが、それも一方的なもので常に今川方の勝利に終わっていた。

江宮隆之『大原雪齋と今川義元 東海に覇を

唱えた軍師と名将』PHP文庫 2010 4頁

と言うように両家の争いは続いており、それも今川方の「一方的」な勝ち戦で、天文18 (49) 年には織田信弘を三河国安祥城に破るのだった。

更に、天文22 (53) 年、吉良義安を三河国東条城攻めこれを降したのだが、その間隙を窺って、翌 (54) 年には北条氏康 (永正12 (1515) - 元亀2 (71)) が駿河に進出し義元を脅かすのである。

こうした織田家への攻勢のため、織田家中でも動揺が走り、家督を継いだばかりの信長を見限り鳴海城主の山口教継は大高城を奪って今川家に寝返り、また、沓掛城の近藤景春も今川の勢力を恐れてこれに従うのだった。

その後、義元は、武田信玄の助けを得て氏康と戦うが勝敗が決せず、義元、氏康、信玄が善徳寺に集まって談合、相互に姻戚関係を結ぶ事で和議が成立するのである (「善徳寺の会盟」)。

こうして駿河、遠江、三河3国を支配下に置き、今川家は東海地方に大きな勢力を築き上げるのだった。しかしながら、こうした勢力拡大は、義元自身の武略によるとは言うものの、彼は終生、戦の先頭に立って戦う事はなく、老臣大原雪齋 (? - 弘治1 (1555)) の差配に負うところが大きかったのである。従って、彼の死後は次第にその勢力を減退していく

事になる。

そうした中で、義元は、永禄3（1560）年5月、西上をはかるのである。途中、尾張国の沓掛、丸根、鷺頭の諸城を攻め落として桶狭間へ到着。戦勝の宴を催すのだった。

敵、今川義元は四万五千の兵を率い、^{おけはざまやま}桶狭間山で人馬に休息を与えていた。五月十九日馬^{うま}の刻、義元は北西に向かって陣を張り、「鷺津・丸根を攻め落とし、満足これに過ぎたるものはない」と言って、^{うたい}謡を三番うたったそうである。

太田牛一著 中川太吉訳『現代語訳 信長公記』
新人物文庫 2014 100頁

これに先立って、

信長が善照寺まで来たのを知って、^{さつさ まさつぐ}佐々政次、^{せんしゅうすえただ}千秋季忠の二将が兵三百程を率いて今川勢に向かい、勇躍して突き進んだところ、敵方からもどつと攻めかかってきて、槍の下で千秋季忠・佐々政次をはじめとして五十騎ほどが討ち死にした。これを見て義元は、「義元の矛先には天魔・鬼神もかなうものか。良い心持ちだ」とよろこんで、悠々と謡をうたい、陣を据えていた。

同上書 100頁

と言うのである。

そして、織田信長と今川義元とは雌雄を決する戦いに臨むのである。



桶狭間古戦場公園 名古屋市

結

我が国におけるキリスト教の布教にあたって、キリシタン大名と言われる大友義鎮（宗麟）等の役割は大きいのだが、それは、九州と言った地方での事であって、全国的に見た場合、中央にあって、「天下布武」を掲げ、天下統一を目指したと窺える織田信長の果たした役割は大きいと言わざるを得ない。

彼にとって、キリスト教とは何であったのか。西欧の文物の伝達を媒介するもの。西欧合理主義を伝達する者の信仰。はたまた、古来、信仰の対象とされてきた神仏に対抗するためのもの等々。

また、キリスト教を伝えようと来航した宣教師達にとって織田信長と言う人物はどんな存在だったのだろうか。

いずれにしても、彼の活動の時代、日本におけるキリスト教は活発な展開を見せる事になるのである。そうした事から織田信長は、キリスト教のよき理解者だった事は間違いないだろう。

参考文献

- Pinto, F. M., *Peregrinacao de fernao Mendes Pinto*, 4 vols Lisbon 1908-10 岡村多希子訳『東洋遍歴記』全3巻東洋文庫 1980.
- 岡田章雄『キリシタン大名』教育社 1985.
- Milward, P. 松本たま訳『ザビエルの見た日本』講談社学術文庫 1999.
- 池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2016.
- 神田千里『織田信長』ちくま新書 2014.
- 秋山駿『信長と日本人』飛鳥新書 2004.
- 日本史資料研究会監修 渡邊大門編『信長軍の合戦史』吉川弘文館 2016.
- 小和田哲男『桶狭間の戦い』学研M文庫 2000.
- 太田牛一著 中川太吉訳『信長公記』KADOKAWA 2014.
- 小和田哲男『駿河 今川氏十代』戎光詳出版 2015.
- 有光友学『今川義元』吉川弘文館 2008.
- 江宮隆之『大原雪齋と今川義元』PHP文庫 2010.
- 金子拓『織田信長〈天下人〉の実像』講談社現代新書 2014.
- 幸田露伴『蒲生氏郷 武田信玄 今川義元』講談社文芸文庫 2016.
- 海老沢有道『日本キリシタン史』塙選書52 2004.

Research Notes

**The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
from the View point of World History**

MATSUBARA, Masamichi

In part I, I attend study the meeting between Francisco Xavier and Ohtomo Shigenobu in Buzen (Oita Futyu).

In part II, I looked in to the family history of Oda Nobunaga and Imagawa Yoshimoto dealt with the history of both families to check the difference in development between the Oda family and the Imagawa family.